



## ◆特集◆観光と図書館

## 観光の記憶

*= Siedlungs- und Tourismus*

## ベルリンの観光歴史アーカイヴ(HAT)

*= Hasso Spode*

ハッソ・スポート

訳：須永 和之

## はじめに

私たちは観光の時代に生きている。1807年にアメリカ合衆国のハドソン川で世界最初の蒸気船が運航されて以来、1830年、英國で旅客輸送の最初の鉄道線路が敷設され、1870年代になると鋼鉄製の外輪蒸気船が大洋を行き交い、ついに100年後には、ジャンボジェット機が空を制し、交通網のモビリティは想像の域を超えるに至った。

交通技術の発達は今なお続く。これまでの危機や災害のように、最近でも新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起き、ロシアによるウクライナ侵攻が始まったが、長期的にみれば交通技術の進展が止まることはないだろう。

人々は常に旅してきた。かつては支配者や軍の指導者、外交官、長距離貿易業者、学者といった限られたエリートたちのなかには、一生のうちに何万キロも旅した者がいた。しかし、今日では豊かな国では自動車という移動手段によって(1日)約100万人が旅行している。こうした移動には仕事のための通勤や出張も含まれるが、興味を引くことは近代以前とは対照的に、今日の豊かな国の人々の大半は、「必要に迫られて」ではなく、「そこへ行きたいから」、つまり「レジャーのた

め」に旅行している。

今日の移動の大半は、「レジャー・モビリティ」によって占められているといつてもよい。統計によると、ヨーロッパをはじめとして観光は世界の経済を左右する重要な要素になっている。ヨーロッパの人々は世界を牽引するほど旅行好きで、ヨーロッパのほとんどの国の人口の大半が毎年旅行している。ヨーロッパ以外の地域、特にアジアでも旅行する人口は追いつく勢いがあり、たとえ貧しい国であっても一部の富裕層が定期的に休日に旅行に出かけている。

## 旅行と読書

こうした自発的な旅行の大衆化は、印刷物の生産を伴うものだった。この点で、多くの大規模な図書館も観光図書館としての機能を果たす。歴史、社会科学、文学の観点から、旅行ガイドと旅行記の二つのジャンルが特に注目される。

## ■旅のガイドは古代から

古代以来、ヨーロッパには旅行に関する文献があった。なかでもヘロドトス(訳注:紀元前5世紀の歴史家で『歴史』の作者)とパウサニアス(訳注:2世紀のギリシアの旅行家・地理学者で『ギリシア案内記』の作者)の著作は有名である。すでに旅行ガイドや旅行記は独特の分野を確立していた。当時の書物は手稿で製作されたので、高価で稀少だった。旅の途中で、パウサニアスの厚みのある著作を手に取って広げた人はほとんどいなかったであ

Hasso Spode:ベルリン工科大学

すなが かずゆき:本誌編集委員長、國學院大學

キーワード:ベルリン、歴史、アーカイヴ

ろう。

1450年頃に文字が印刷された購入可能な本が出版されると、様相は一変した。当初、書物の多くがキリスト教の神学論によるものだった（新しい印刷技術の普及は、ラテン語からドイツ語に翻訳されたマルティン・ルターの聖書によってもたらされた）。しかし、すぐに多くの本が外国の知識に関することを扱うようになった。とりとめのない内容を含んだ旅行に関する指南書 *Apodemikon*（訳注：16世紀から18世紀に流行した旅行に関する説明書）、主な経由地を示した旅程図 *Itinerarium*、主な観光スポットの説明 *Breviarium, Deliciae*など、見知らぬ国へ旅に出る人々に向けた書物がつくられた。

## ■ 19世紀～20世紀、次々と登場した便利な旅行ガイド

上記三つのジャンルを融合した、簡潔で客観的な情報に限定された旅行ガイドの近代的な形態が現れるのは、19世紀初頭のことである。携帯用の便利な旅行ガイドは、観光客向けとして初めてのものだった。

旅行ガイドで最初に最も成功したのは1836年にロンドンの出版社から刊行されたジョン・マレー3世 John Murray III（訳注：近代的な旅行ガイドの発案者ともいわれる）の本であった。しかし、後発のドイツの出版者カール・ベーデカー Karl Baedeker が、マレーのアイデアを取り込んで出版した旅行ガイドの売り上げはマレーの旅行ガイド *Handbooks (Handbücher)* を追い抜き、ベーデcker Baedeker は英語で旅行ガイドの代名詞となった。あるオペレッタに、「国王と政府は間違いを犯すことがあっても、Baedeker は間違うはずがない」という台詞があるくらいだ。学習熱心な旅行者にとって有名な赤い本は必需品となつた。

正確で整った地図と交通手段に関する情報を通じて、税関規則、ホテル、レストラン、役所、博物館、礼拝所のような宗教施設、宮殿や城、祝祭、パレード、墓地、飲食の習慣、チップの慣行など、Baedeker は旅行者に外国を紹介して、「(1839年にカール・ベーデカーが書いたように)

賃金で雇った迷惑な同伴ガイド」から旅行者を解放した。Baedeker のおかげで旅行者は自立して、旅行が気軽にできるようになった。

1900年頃になると、フランスでは1841年から『ギド・ジョアンヌ Guide Joanne』（訳注：アシェット社が刊行した歴史・美術に詳しいガイドブック）、1919年から『ギド・ブルー Guide Bleu』（訳注：アシェット社が刊行した鉄道旅行用のガイドブック。英語ではブルー・ガイド）が出版され、ドイツでは表紙に黄色の帯のついた安価なグリーベン Grieben のガイドブックが Baedeker のガイドブックシリーズの出版部数を超えるなど、ほかにも多くの旅行ガイドブックのシリーズが書籍市場に出回っていた。

Baedeker とギド・ブルーは今日でも出版されているが、今ではインターネットのサイトが印刷された旅行ガイドを強力に圧倒するほどになっている。

## ■ 人々を旅にいざなう文学やエッセイ

マルコ・ポーロやイブン・バットゥータからアレクサンダー・フォン・フンボルトとチャールズ・ダーウィンの綿密な旅行記、ニコラ・ブーヴィエとブルース・チャトワインの旅行小説、マーク・トウェインの旅行エッセイまで、大多数の旅行記は実際の旅行でなく、自宅のアームチェアでくつろぎながら想像をめぐらす旅行を提供していた。後者の旅行小説と旅行エッセイの場合、虚構と現実の旅行の境界はあいまいである。

フランスの作家ジュール・ヴェルヌの小説の主人公フィリアス・フォッグは80日間で世界を一周した。ドイツの作家カール・マイが1892年以降に青少年向けに書いた『カール・マイ冒險物語』シリーズの『オスマントルコへ行く』から『アパッチの酋長（ワイルド・ウェスト）』までの物語は、20世紀の終わりに読まれなくなるまで、出版された半分は翻訳であったが、発行部数2億部に及んだ。

旅行記は、実在の旅であろうと架空の旅であろうと、描写された場所を見てみたいという憧れを読者に抱かせるものであり、観光を盛んにする精神的な原動力となった。もちろん、ロマン派と前

衛派の文学者の散文と詩にもあてはまる。クロード・ロランやウィリアム・ターナー、カスパー・ダーヴィド・フリードリヒの絵画のように、それまで醜悪と疎まれた光景を美化することで、その国とそこに住む人々に対する観光客の新たな視点をつくりだすことに貢献した。  
人々を旅にいざなうこうした文学の先駆者としては、1732年に歓喜の詩『アルプス Die Alpen』を発表したアルブレヒト・フォン・ハラー Albrecht von Haller, 1761年にアルプスを舞台にした小説『新エロイーズ Julie ou la Nouvelle Héloïse』を発表したジャン・ジャック・ルソーが挙げられる。それに続くといえば、ウィリアム・ワーズワースがイギリス北部湖水地方の自然を描写した詩、バイロン卿がライン川の旅を謳った詩と 1816, 17 年に発表したアルプスの神秘劇『マンフレッド Manfred』（訳注：アルプス山脈のユングフラウの古城を舞台にしたマンフレッドと魔女、邪神、精霊たちとの対話劇）がある。さらに後発の旅行記としては、1862年から1889年にかけてテオドール・フォンターネがベルリンで発表した『マルク・ブランデンブルク周遊記 Wanderungen durch die Mark Brandenburg』によって、その地位を確立した。

## ■学術的文献とエフェメラ

観光に関する印刷物は、旅行ガイド、旅行記、詩だけとは限らない。ほかにも二つの資料のジャンルがある。  
一つは、観光に関する学術的な文献である。観光という社会現象に関する研究は、1900年頃からドイツ語圏を中心に始まった。1930年代から40年代にかけて一躍脚光を浴び、今日では研究の一分野として確立されているが、経営学と地理学の中間に位置する観光学の経済的・文化的な重要性に比べても、研究分野としてはまだ非常に狭い。小説や物語などのフィクションとは異なり、こうした文献は通常、大学図書館の特別コレクションで閲覧できる。  
観光学はあくまでも実務的な学問であるため、図書や雑誌は主に研修用に使用され、古い資料は容赦なく廃棄されることが多い。したがって、そこ



ハンブルクーアメリカライン

Hamburg-Amerika Linie

日本の女性と富士山、旅客船が描かれた

旅のポスター

これらのコレクションは、より広範囲で歴史的な研究にはあまり適していない。

もう一つは、印刷された「使い捨て品」、いわゆるエフェメラ（長期にわたって使用し保存することのない資料）である。これらには、特に観光広告のポスターが含まれ、頻繁に収集される。この媒体は1920年代に普及し、1960年代まで高い芸術的な水準を保っていた。ポスターの発行元は、鉄道会社、海運会社、バス会社、航空会社のような交通事業者、国または地域の観光局、第二次世界大戦後は観光事業者となった。

ポスターのコレクションは図書館ではほとんど見られず、博物館や観光業者などのアーカイヴが所蔵している。ポスターはアートジャンルと見なされていて、広告パンフレットは一部精巧にデザインされ、ポスターと同じグラフィックモチーフを含むことがあるにもかかわらず、これまでそのような評価を受けたことはなかった。これらの大量印刷されたチラシや小冊子は、後に旅行業者の厚いカタログと一緒になり、観光業界の真の「使

い捨て商品」となった。インターネットが普及したにもかかわらず、今日も盛んに生産されている。これらの小型のエフェメラは、図像やその他の多くの情報を含むので、歴史的、社会学的、文化的研究のために非常に有益で、活用する必要がある。しかし、パンフレットを持っている博物館やアーカイヴはわずかである。

観光歴史アーカイヴの資料には印刷資料以外の非印刷物も含まれ、個人的な録音情報、いわゆるパーソナルな文書としての旅行日記、写真、休暇に記録した動画、お土産も含めれば、数えきれないほどある。一方、観光業者、自治体、観光代理店、特に旧共産主義国の国家機関など、さまざまな機関のファイルもある。

## 時間の旅としての観光

機関や国を越えて観光関連の資料を収集するアーカイヴの中には、ベルリンの「観光歴史アーカイヴ Historische Archiv zum Tourismus (HAT)」<sup>1)</sup>があり、特にパンフレットのコレクションは世界最大級であろう。アーカイヴの名称は慎重に決定した。それは旅行アーカイヴではなく、観光アーカイヴである。

## ■ 「旅行」と「観光」

一般的には、観光とそれ以外の動機による旅行、言い換えば個人的な目的による旅行と、さまざまな目的を果たすための旅行は区別されている。新型コロナウイルス感染症のパンデミックで、法律によって観光と旅行は区別された。「旅行の正当な理由」(ドイツの条例 2020による)があれば、国境を越え、ホテルに一晩滞在することができた。経験的に多くの意味上の重複があつても、観光は定義上、旅行の下位語であり、特別なケースである。それにもかかわらず、「旅行」と「観光」あるいは「トラベル」と「ツーリズム」という用語は、専門文献でも同義として扱われることが多い。これは英語でよくあることで、ドイツ語版ウィキペディアでも「観光の歴史は旅行の歴史と同じ」<sup>2)</sup>と書かれている。世界観光機関(UNWTO)は、レジャー関連の

交通機関だけを扱っているわけではない。観光と旅行の違いの公式をその名前で表現するならば、世界旅行機関と呼ばれるべきである。実務上の問題では、このあいまいな用語の定義で十分かもしれないが、詳細に分析する場合は十分とはいえない。これは、研究が現代社会における観光を特徴づける究極的にロマンチックな思考と感情の中心的な要素を見逃しているためである。観光は現代という時代の示準化石である。

## ■ 「旅行のための旅行」

人々が常に動き続けることは事実である。したがって、観光は先史時代の遊牧民の遺伝的遺産に基づいているのではないかと推測されることもある。とはいえ、旅をしたいという私たちの願望はかなり最近のものである。それはせいぜい 300 年前から始まったことだ。工業化の前夜の 18 世紀のヨーロッパは、文明の激動の時代を迎えて、ヨーロッパを世界から切り離し、「進歩」と「啓蒙」というスローガンのもとで熱く議論されるようになった。ヴォルテールとカントとともに、進歩を通じて人類の「洗練」を賞賛する人もいれば、フォン・ハラー（訳注：スイスの政治学者カル・ルートヴィヒ・フォン・ハラー）やルソーのように、進歩によって引き起こされる「奴隸化」と「脱自然化」を非難する人もいた。

「人間は自由なものとして生まれた。しかもいたるところで鎖につながれている」とルソーは 1762 年に（訳注：『社会契約論』のなかで）書いている。彼の思想の後継者たちに「自然に帰れ！」と唱えた。これはまさに観光のルーツといえるであろう。おそらく、それは幸福だった過去へさかのぼる旅<sup>3)</sup>であった。それは進歩がすでに支配していた中心部の都市から、自然と自由、そして本物の姿がまだ残存していた周縁の地方へ導くことだった。現実でありながら想像の世界でもある、時間軸のユートピア、クロノトピアが出現した。その峻険さと荒々しさのために、以前は嫌厭されていたアルプスと北部の海岸のような地域に焦点が当たった。貧しい国だったスイスも自由と自然に満ちた地上の楽園と再解釈された。

同じ時期に世界最初の海辺のリゾートが開発さ

れた。不毛で危険な海岸は、病気が蔓延する文明の地からの逃避先となった。そして、ロマンチックな観光客の視線は、他の山々や荒廃した城や古い町並みにも注がれ、それまで軽蔑されてきた中世の遺構として「絵になる」と称賛されるようになったのだ。ますます見るべきものの規範が拡大した。

冒頭で述べた交通革命により、19世紀半ばから世界の観光化が進み、それは現在も続いている。自然と歴史への憧れを抱くのは、それまで知的なアヴァンギャルドに限られていたが、目的のない「旅行のための旅行」(1795年に初めて現れた言葉)の理想は、今では工業化とともに主役となつたブルジョワジーにも浸透した。産業革命、そして公務員と会社員がとる有給休暇のおかげで、観光という新しい経済・技術システムが出現した。

### ■本物の経験を求めて

そして、ルソーが「ロマンチックな」アルプスと、トビアス・スマレットが「絵のように美しい」リビエラを絶賛したとき、彼らは今日何十億人の行楽客が世界の山々や浜辺に引き寄せられるとは思いもよらなかつたであろう。

ロンドン・ヒースロー空港だけでも、スマレットが生きた時代の英国に住んでいた人口の7倍の人が通過し、そのほとんどは観光客である。休日の旅行は日常化して、一般的な消費財となつた。それでも、旅行システムの産業化と旅行形態の多様化にもかかわらず、観光という概念を構成する基本の柱は、<sup>1</sup> 懐古、<sup>2</sup> 本物、<sup>3</sup> 自然、<sup>4</sup> 自由と驚くほど無傷のままであった。

さらに、私たちは日常の時間とは異なる異国の地での本物の経験を求めて、結局はロマンチストであり続ける。休日をどこでどのように過ごすかは意外に関係がないように思える。バリ島からマヨルカ島まで日当たりのよいビーチの巨大なレジャー施設(世界の観光の3分の2を占める)であつても、バカンス客にとってはクロノトピアとして、つまり日常生活で失われたと思われている「自然らしさ」のための心理的・社会的自由空間として確かに機能し得るのである。この点につい

ては、ルソーの時代から何も変わっていない。

## HATの開設、発展と所蔵コレクション

### ■研究とアーカイヴのための施設

「私たちの時代の特色の一つは大衆による旅行である。1年のうち11か月を残りの1か月への準備と見なして、存在の高みへと続く梯子と考える人は少なくない。」<sup>4)</sup>とフォンターネが叙述したのは先見の明があった。

この「大衆による旅行」を観光歴史アーカイヴHATが保管している。ベルリン工科大学メトロポリタン研究アーカイヴの一つである観光歴史アーカイヴは、研究インフラとして非常に重要であるにもかかわらず、長い間(そして残念ながら今も)軽視されてきたドイツの多くの大学コレクションの一つである。「観光」というテーマはアカデミズムの世界ではあまりよい評判を得たといえなかつたので、なおさらだった。観光は低俗な大衆の楽しみと考えられ、嘲笑と嫌悪の対象であり、いわゆる社会哲学のレベルでは文明批判として関心があつた。

しかし、消費と大衆文化の歴史に対する研究者の関心が高まるにつれ、観光もまた、この数十年の間に研究の焦点となってきた。その範囲は、ローカルからグローバルな歴史まで、目的地における経済的、政治的、社会的、精神的影響、特にイメージとアイデンティティの構築から、目的地と周辺地域の相互依存関係、周辺地域の観光需要の基盤となる政治、社会、精神のメカニズムまで、多岐にわたる。

### ■観光歴史研究の国際的拠点に

観光歴史アーカイヴHATは、ベルリン自由大学の観光研究所の古代史研究者ウォルター・エーダーWalter Eder教授の発案で1986年に設立された。この研究所は、1929年にベルリンで世界初の「観光研究所」(訳注: この研究所にはアーカイヴが併設されていたが、現存しない)を設立したベルト・グリュックスマン教授の先駆的な研究を受け継いだ。観光歴史アーカイヴの基礎は、ベル

リン国際観光見本市 ITB を主催したドイツ旅行協会のフランツ・バーガー常務理事の観光史コレクションだった。さらに 1,200 枚のポスターや、グリュックスマン教授の研究所からのコレクションの一部なども、すぐに追加された。

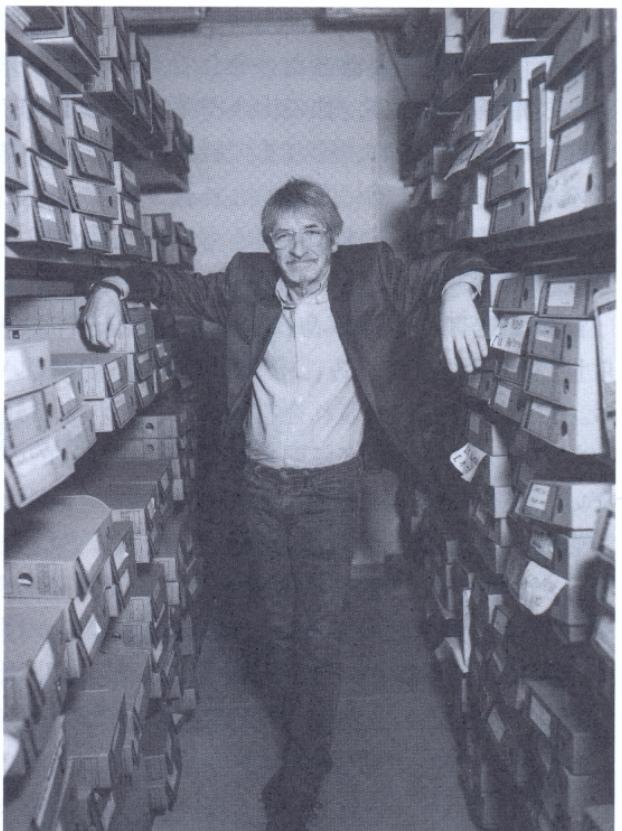
同時に、まだ比較的小規模だったアーカイヴのもとに学際的な「観光史に関するワーキンググループ」が結成された。歴史家で社会学者のハッソ・スポーデ博士が代表を務めるこの協会は、世界で初めての試みであり、1990 年代に開催された会議や出版物により、それまでほとんど注目を集めてこなかった歴史的な観光研究の認知度を徐々に高めるのに役立った。

また、特に 1930 年代から 1960 年代にかけて西ドイツの観光局の中心的人物であったフランツ・F・シュヴァルツェンシュタインの約 2,400 冊の書籍と定期刊行物、数千点のパンフレットやファイル、旅行事業家ヴァルター・カーンの約 1,500 冊の書籍と定期刊行物のコレクションによって、1990 年代にアーカイヴが大幅に拡大された。

2000 年代に入ると、ハッソ・スポーデはアーカイヴの管理を引き継ぎ、コレクションを専門的に整理して、主に書籍や雑誌の目録を作成した。ベルリン自由大学の閉鎖に伴い、2012 年に観光研究所のアーカイヴはベルリン工科大学に移管された。過去 20 年間、HAT は観光の歴史文化研究のための国際的な拠点に発展した。日本からも見学者が訪れるようになった<sup>5)</sup>。

## ■ HAT のコレクション

HAT のコレクションは総延長 700m 以上の書棚に所蔵されている。18 世紀以降、100 カ国以上から集められたさまざまな資料を提供している。目録には、13,000 冊以上の図書や雑誌のほか、約 1,500 枚のポスターと 1,300 枚の地図が含まれている。図書の約 4 割が旅行ガイドブック（5,000 冊以上のうち、ベーデカー Baedeker のガイドブック 250 冊、グリーベン Grieben のガイドブック 300 冊が含まれる）である。このほか図書には、歴史書 1,000 冊、観光研究 1,300 冊、旅行記 1,000 冊、地域研究、美術文献、交通研究、図版 1,100 冊、統計書 1,300 冊などがある。新しい資



1900 年代、観光史に関するワーキンググループを発足させたハッソ・スポーデ氏。HAT の書庫にて

料が次々と寄贈され、スタッフが不足しているため、一部の図書や多くのポスター、地図などはまだ目録化されていない。

HAT の最も特別な宝物のような貴重資料は、エフェメラと個人的な文書である。1920 年代から現在までの約 5 万点のパンフレットは、場所と時間によってアーカイヴ専用の整理ボックスへ体系的に分類されているが、目録に記録されているわけではない。パーソナルな文書は主に写真のアルバムだが、手書きの旅行日記なども含まれ、その多くは未整理のままである（例えば、2021 年に HAT が熱心に入手を試みた旅行者の遺品のうち 90 箱が未整理である）。このほか、遺贈品（ただし、一部には目録を作成した資料がある）やファイル資料も未整理であり、部分的にデジタル化されていない資料がある。

目録は OPAC に対応していないが、アーカイヴのホームページから PDF 形式でダウンロードできるなど、さまざまな出力形式 (RIS など) のテキストファイルとして完全な形で公開されてい



◀ HAT の書庫の一部。ポスター類が整理ボックスの中にある

る。たしかにアーティストは何かを考へよう。残念ながら、HAT の貴重なコレクションは、現在、非常に限定された範囲でのみ使用することができる。新型コロナウイルス感染症のパンデミックの前まで、アーカイヴの運営は観光業者からの資金によって支えられてきた。それは制約が厳しく、資金の支払いが滞った。それ以来、第三者からの資金調達はない。HAT には実働するスタッフが残っておらず、ボランティアの活動では補うことはできない。州からの資金調達を申請したが、観光歴史アーカイヴの将来は依然として不透明である。

<注> は、原文より転載される際の著者名

1) <https://university-museums-and-collections.net/berlin/historical-archive-for-tourism-hat>.

2) <https://de.wikipedia.org/wiki/Tourismus>.

英語圏では、観光と他の旅行形態との典型的な混合、特に 17/18 世紀の貴族の教育旅行であるグランド・ツアーやに関する研究として、Eric Zuelow. *A History of Modern Tourism*, London, 2016 が挙げられる。ただし、概念の差異については、Hasso Spode. *Mobilität, Reisen, Tourismus* を参照のこと。観光学とモビリティ・ターンの間の用語の変容に関しては Harald Pechlaner/Michael Volgger (eds). *Die Gesellschaft auf Reisen—Eine Reise in die Gesellschaft*. Wiesbaden, 2017. を参照してほしい。

旅と観光展のポスター。  
1911 年 4 月 1 日～6 月  
20 日、ベルリン動物園  
にて、とある。  
HAT のアーカイヴより

3) Vgl. Hasso Spode. "Reif für die Insel". Prolegomena zu einer historischen Anthropologie des Tourismus. In: Christiane Cantauw (Hrsg.). *Arbeit, Freizeit, Reisen*. Münster/New York, 1995 (<https://hist-soz.de/publika/DGV.pdf>) ; ders.: Zur Genese des Tourismus. In: Gerd Jüttemann (Hrsg.). *Die Entwicklung des Psyche in der Geschichte der Menschheit*. Lengerich 2013; Jan Pezda. Tourism: Retropian Time-Travel. In: *UR Journal of Humanities and Social Sciences*. 19-2, 2021 (<https://repozytorium.ur.edu.pl/bitstream/handle/item/6875/9%20pezda-tourism.pdf?sequence=1&isAllowed=y>).

4) Theodor Fontane. *Von vor und nach der Reise*. Berlin, 1894.

5) 朝日新聞. 2018.11.26 (<https://globe.asahi.com/article/11965834>) ; 観光文化. 241 号, 2019 (<https://hist-soz.de/hat/HAT-japan192.pdf>) .

(2022.4.28 受理)

# 現代の図書館

vol.60 no.2

■観光と図書館

2022.6

■日本図書館協会現代の図書館編集委員会

専門学校日本ホテルスクールの図書資料室について  
—ホテルが創ったホテル学校にあるユニークなホテル専門図書館

●武内 悟

日本交通公社「旅の図書館」について

●吉澤清良, 福永香織, 泉佳奈, 大隅一志

観光の記憶 ベルリンの観光歴史アーカイヴ (HAT)

●ハッソ・スポーデ, 訳:須永和之

パリの観光旅行図書館 ●マリー=セシル・モラン,  
レヌー・ガネーシュ, イザベル・コラン, 訳:須永和之

景観理論の視点における図書館の変容—公共文化空間の  
「ホストとビジターの共益」 ●李 阳, 訳:須永和之

## 投稿

専門図書館の蔵書の書誌に対する ISBN 大量選及入力の実践

—たましん地域文化財団歴史資料室を事例に

●齊藤誠一, 保坂一房, 吉本龍司